

の足輕横田兵介も来つて、船を備はんとすれど備ふべき船なし。是に於て兩人口論を始めたり。小平は後に信立に殺さる(信州川中島合戦)

こへゑ 綿屋小兵衛。大阪上町の口入業者なり。河内屋與兵衛に銀を貸し其返済を催促す(女殺袖地獄)

こへゑ 一ツ屋五兵衛。茶碗屋藤平次

の父なり。大阪松屋町九之助橋に住し陶器商を營む。「かへいじ」を見よ(生玉心中)

こまのしん 武知駒之進。惟任判官光秀の甥なり。光秀と共に反し、平朝臣香長の御臺所を圍み、御臺所の彈を切刺りしが、御臺所に斬付けられて斃る(本朝三國志)

こまん 小高。肥後熊本の子笹野三五兵衛と婚約ありしが、三五兵衛病死せりと聞いて國を出で、但馬城主の京都の邸に勤仕し、侍女の林を我夫の妻とせざるものとは知る由もなかりしが、偶々川源五兵衛を挑みしことより引いて林の我夫たるを知るに至る。後に夫と共に源五兵衛を尋ねて薩摩に下る(薩摩歌)

こまん 小高。伊勢國鈴鹿郡開の宿白子屋左次内の出女にして、馬追伊達與作と感愛を通す。小高の父實光相納總分に遭ふや、小高これを救はんとし賢學を讀みて其親を時番す。偶與作が馬方八藏と稱博して預け、八藏は與作の妻ある馬を奪はんとす。是に於て小高父を救ふ爲に時番したる銀を與へて八藏を去らしむ。馬追兄三吉、與作の爲に窃盜して發覺し、尋て八藏を殺して三吉死罪と定まるや、小高は父を思ひ三吉に同情して憂苦に堪へず、與作と共に死せんとして迷ひ出でし

が、しらべの姫及び其乳母波野井に救はる(丹波與作)

こむつ 小陸。和膳内後(國性爺といふ)の妻なり。梅禮皇女肥前國平戸に遷居し、和膳内に逢うて話合ふ有様を見て嫉妬せしが、其皇女なるを知るに及んで心解け、夫より皇女を托せらる。後、皇女を伴ひて明國に渡る(國性爺合戦)

こむつ 小陸。和膳内後(國性爺といふ)の妻なり。梅禮皇女肥前國平戸に遷居し、和膳内に逢うて話合ふ有様を見て嫉妬せしが、其皇女なるを知るに及んで心解け、夫より皇女を托せらる。後、皇女を伴ひて明國に渡る(國性爺合戦)

こよし 伊勢國鈴鹿郡開の宿白子屋左次の内出女にして、小高の朋輩なり(丹波與作)これたかしんわう 惟荷親王。清和天皇の異母兄なり。天皇と御位争に負けて比叡山麓小野に閑居せられしが、紀名虎が生前より謀反を勧められたるが、伴大納言景前このことを思出されて招魂の法を修せらる。親王托鉢修行者に扮して大内に詣り、無理難題を書掛けて帝を追拂ひ、偕して帝と稱せられしが相撲勝負によつて御位争に負け、暴行に及ばれんとしして桂馬園(民部俊綱)に留められ給ふ(丹筒兼平河内通)

これもち 上總介平朝臣惟茂。民部卿兼忠の嫡男なり。安和二年春禁中の變化を退治したる功によつて余吾將軍に任せられ、平國の寶劍及び宮女世繼御前を賜はる。然るに寶劍世繼御前入の除跡失せしかば、惟茂これを尋ねて信州戸隠山に入り、女人に逢らうて酒に酔ふ。やがてその女鬼形に化して消

失す。是時連の幽霊現はれて非業の死を遂げし概略を語り、帶刀廣房の一子房若の取立を懇請して劍の本地を述べ。惟茂その請を諾して寶劍を得たり。かくて後その寶劍を挿つて戸隠山の惡鬼を退治す(槍狩劍本地)

ころくろう 望月小六郎。望月六郎左衛門高貞の子にして狼の左京進盛光の家來なり。主人の娘春姫に従ひて北條殿なる鬪三の庵室に身を寄せし時、近藤兵庫守廣忠の兵に攻められて防戦し、春姫を助けて津の國路へ落延び、春姫と共に荻野の夕霧供養の廟に列し、夕霧の墓所に詣つ。後、奈良に行きて其主盛光等と石川三右衛門。江戸にて療法に兵法を學び、師と共に流寓して京都に來り、大橋詰鐘屋にて憲法の異母兄顯定の荷物を取奪せしを手始めに遂に強盜の巨魁となる。吉野川に投身せんとする龍門家の姫君和琴の前を勾引して大阪三軒屋町御手洗屋に賣り、部下を率ゐて御手洗屋に押入り、財物を奪うて捕吏に圍まらる。五右衛門數多の捕吏を殺し、憲法の子久吉を背負うて河内國道明寺まで逃延び、攝持の大釜中に溺置せしを捕へられて釜ながら京に送られ、七條河原にて釜煎の酷刑に處せらる。刑場に於て辭世の歌を詠んで曰く、石川や濱の眞砂は盡くるとも世に盗人の種は盡きせじ。時に慶長十五年なり(傾城岡岡染)

こんざ 笹野權三。出雲藩主の表小姓を勤め美男なり。同輩川御伴之丞の妹と感動を通じ相會せる條件之丞來り、權三に對して競馬を挑む。偶若木忠太兵衛も來り、藩主の若殿祝言の悦によつて競馬行はるべきを語り、

茶漬指兩淺香市之進不在なるによつて眞の磁子の茶儀を權三及び伴之丞の兩人中に命す。然るに兩人とも未だ眞子の傳授を受けざるを以て、權三先づ市之進の宅を訪うてその妻おさみに逢ふ。おさみは權三の美貌を覺して行末己が娘のお菊と夫妻たしむべきを約し、其夜おさみは權三數寄屋に入り秘傳の巻を閲讀す。是時伴之丞もおさみをたらしめて秘傳を受けんとし、庭中に忍入つて様子を窺ふ足音に、今まで喧かりし蛙の聲はたと止む。權三座んで立ち、おさみを眞子の立つを疑つて短話喧嘩となり、互に傳を奪つて庭に棄てる。伴之丞に給はれて蓋頭の證據物とせらる。是に於ておさみは權三不義ならぬ不義となり、相携へて走り、山城國伏見町京橋の上にて市之進に女敵討に遭ふ(鐘聲は享保二年七月十七日大阪府腰橋上にて女敵討に遭ふ)

こんわうまる 澁谷金王丸。源義朝の臣なり。主君に従ひて尾張に落ち長田庄司致に寄る。義朝が瀆茶屋の警備に陪從して出で、義朝の浴衣を取りに行く(鏡田兵衛)義朝の墓に詣りて藤九郎盛長と邂逅し、互に異合しが相和し、長田庄司の兵と兵衛野に戦つて庄司を斬り常盤牛若の母を救ふ。後、土佐坊昌俊と改名し、鳥帽子折五郎大夫方にて六波羅勢と戦つて牛若を助ぐ、長田庄司の首を携へて姪小島に行き頼朝に謁す(源氏烏帽子折)

さいさう 片桐才藏。駿河守貞康の家士なり。貞康が今川了俊の遺孀を横領せんとして反するや、才藏は了俊の嫡子仲秋を追撃し、三河國岡崎なる松葉川にて仲秋に殺さる(今川了俊)

さいてん 在天。山上次官有風の末子なり。七歳にて出家となり多武峰に登る。長じて兄別風の行方を尋ね四國中國を巡る。蘇我入鹿の反逆を聞き父の有風と共に唐の使者に扮し、入鹿に近付き刺さんとし縛せらる。是時斬られたる父の首首を飛んで入鹿を追捕ひて天の縛を解く。在天泣く泣く父の首を抱きて多武峰に歸る。後、春日社祭禮の日鎌足の子の淡海公と共に商人に扮して路傍に飲食店を出し、入鹿の郎黨坂熊團中・同團下の立寄れるを殺す(大冠冠)

さが 扇屋の湯女より伏見坂町柏屋の遊女となり、茶碗屋嘉平次と馴染む。嘉平次難儀に遭ふ毎にさがも共に憂ひ、互に身の不遇を歎じて生玉社茶店の側に情死す。「かへいし」をも見よ(生玉心中)

さがてんわう 嵯峨天皇。大海原王子の逆心に宸襟を惱ませ給ひ、北嵯峨の離宮に移らせ給ふ。前判官酒額來つて離宮を拜せる際、誓て己が子の勝願に離別せられたる妹花世に邂逅して互に情に泣く。爲に勸説ありて花世の家に舅酒額を養はしめ給ふ。後、天皇弘法大師旁御修法の場に行幸し給ふ(嵯峨天皇)

さかめのわうじ 逆日王子。齊明天皇の第一皇子なり。葛城の大君が皇太子に立ち、花照姫を王妃に定めんとされしを妬み、自ら帝位及び姫を奪はんとし、給帥狩野氏久に命じて花照姫を醜女に畫かして齊明天皇に見せ奉り、天皇の不機嫌なるに乗じ之を惡様に謀して其姿給を往來に曝す。また金輪五郎今國を殺して粟津が原に梟首し、遂に帝に迫つて廣造の神器を得。淫樂に耽られしが遂

に金岡に害せられ給ふ(天智天皇) さくらば 「まつがえ」を見よ。

さくあもん 美濃屋作右衛門。京都三條馬九の祇商人なり。神谷の猪俣實興次右衛門の娘のお梅を養ひ、之と婚せんとし難賃屋にて祝宴の席上石打に遭ふ(心中萬年草)

ささなみ 連。吉備國産の妻なり。大碓王子が筑紫、兎賊八十梟帥と通じ給へる状を携へて、景行天皇に拜請し大碓王子の反逆を奏上せんとし、吉備武彦に遮られて其状を引裂かる。是に於て連は武彦の心を疑ひしが、武彦が大碓王子の悪心を矯正せんとして苦慮の餘り一子田鶴子を刺し、なほ夫妻共に自刃して大碓王子を誅めんとするを見て、連深く其忠心に感じて兩人の自刃を制止す(日本武尊 吾妻鏡)

さだ 明石の貞。大阪堂島新地天満屋の遊女お島を伴うて芝居見物に行き、歸途舟に乗りお島をして浮瑠璃を語らむ。お島の情夫、口右衛門隆より其舟の後を附け行くを見始め、口論して之を辱かしむ(二枚袖)

さだいへ 京極中納言藤原定家。源頼朝の子萬壽君を服して頼家と名乗り四位少将に補せらる。定家の勅使となつて鎌倉に下り、曾我五郎の力業を見たと所喜す(曾我虎が原)

さだひろ 駿河守貞廣。今川了俊の舎弟なり。了俊病となるや己れ國政を擅にせんとなす。然るに了俊は青砥藤次を土民より拔擢して重臣となし後事を託す。是に於て貞廣の心平ならず。藤次を家臣中に招いて辱かしむ。了俊臨終の時貞廣も招かれて嫡男の仲秋を守護するやう頼まれ、家臣等と共に起請文を書かせらる。了俊の没後其起請文を奪返せんとし、正國坊を召して其旨を語る。正國坊即ち細意を叶へ申すからは我父の平舎にあるを敵免さるべきを請ふ。貞廣之を諾し、直に大道寺勝房を召して大敵を迫る。勝房不同意を述べて罵る。是に於て貞廣は仲秋の墓をせらるに逢うて勝房及び荒川貞平を謀し、遂に反して兵を擧げて了俊の跡を横領して驕奢を極めしが、仲秋の軍に攻められて捕虜となる(今川了俊)

さだみつ 碓井貞光。源頼光四天王の一人なり。生命により江文宰相爲成夫妻を追拂ふ。葛城山に良門及び石蜘蛛退治の軍に従う。武功を立つ(關八州整馬)

さちゆうだ 獅獅木佐仲太。七草四郎高衛の郎黨なり。四郎の邪法を信仰し、京都御前町に住し近隣の者を集めて變態し、金を興へ佛像を燒拂うて邪法に歸依せしむ。富樫重重の家士柳瀬權藤六に攻められて防戦し、權藤六を殺して遁る。後、四郎と共に肥前七草城に據り、幕府の軍と戦つて討死す(傾城島原駐合戦)

さちわかまる 幸若丸。桂金吾廣國の子なり。惟仁惟高兩親王の御位争の相撲に、惟仁親王方の力士となつて惟高親王方の力士を倒す(井筒業平河内通)

さちあもん 佐治右衛門。和泉國水間の里の農夫にして清十郎の父なり。姐おしゆん及び清十郎許嫁の女おさんを伴ひて大阪見物に出で、清十郎の相手代勤十郎に逢うて其言に騙され、清十郎の主人の娘お夏の嫁入道具の發送を禁止せむ。清十郎これが爲に主人の嬢を受け、罪を負うて主家を放逐され、捕吏に縛されて刑場に引出さる。佐治右衛門其場に來つて勤十郎の罪を明にす(五十年忌歌 念佛)

さつ 成田武右衛門の女にして久米之介の姉なり。亡父の遺骨を携へて高野山に登り、女人堂にて久米之介お推情死せんとするに邂逅し、弟と知りずして久米之介の居所を尋ね、萬年草を水に浸して安否を占ふ(心中萬年草)

ささい 驚坂左内。丹波領主由留木侯の臣なり。由留木侯の女しらべの姫に降從して伊勢國鈴鹿郡關の宿に泊し、しらべの姫及び其乳母波野井の命を奪じて與作及び小萬を奪ふ(丹波與作)

さねつな 直江山城守實綱。越後國守長尾輝虎の重臣にして、甲斐國守武田信玄の重臣山本勘介晴幸の妹の夫なり。輝虎の意を受け勘介をして輝虎に仕へしめんとし、妻をして勘介の母を招かしめ、策を用ひて勘介をも呼寄せて遇せしめ、遂に其意を達すること能はざりき(信州川中島合戦)

さは 澤。廣葉果房の郎に腰元奉公せし時下男の久作と馴染み、匿著して江州伊吹山の麓に支商を營む。廣房の奥方・子の房若を連れて立寄るや、久作悪心を起し奥方母子を害せんとす。澤善恩を説きて夫を諫めしが、遂に駭かざるを見て房若の身代りに我子の萬

虎を刺さしめ、夫と闘うて殺さる。後、信州戸隠山に幽妻となつて現はれ、余吾將軍惟茂に逢うて己が非業の死を遂げし概略を語り、若君房若の取立を懇請し、劍の本地を述べて平國の寶劍を渡す(杵釘劍本地)

さは 阿澤。河内屏與兵衛の母なり。與兵衛放蕩廢人なるより、之を懲戒せんとして放逐せしが、親子の愛情にほだされ、豊島屋をおき訪ひ銀を託して、與兵衛に與ふること依頼す(女殺油地獄)

さぶらう 本間山城入道三郎。佐渡の郡可なり。北條相模入道より日野中納言資朝を預る。或日資朝の子阿新九及び資朝の思人菊姫が資朝を尋ねて来る。三郎乃ち菊姫に懇懇し言寄りて峻拒され、怒つて資朝を殺し、菊姫・阿新九を縛す。其夜二人縛を切つて遁れ、那智の妙法坊に助けられて船に乗る。三郎船にて追跡せしが、大風に遭ひ其船覆覆して溺死す(本朝用文意)

さぶらう 濱田三郎。長田庄司敷致の下人なり。主命を奉じて酒宴の席に出て、屏風を倒し鎌田正清を押し、その上に乗り互に刺合つて死す(鎌田兵衛名所逸)

さぶらう 「しげいへ」を見よ。

さよひめ 佐用姫。佐渡國松浦庄司の娘なり。五位の介諸君と感勤を通す。諸君は花人親王を助け、佐用姫の兄兵藤太左衛門は花人親王の敵山彦王子の味方となる。佐用姫は諸君に従ひ、母の手引によつて兄を刺さんとす。母を刺す。後、諸君に連れられて播州屋の上に至り兄と逢ふ(用明天皇職人鑑)

さらしな 更科。手塚蟬樂の娘なり。島原村屋の遊女となり、葛西清治と馴染みしが、七草四郎高衛に誦出さるる際、富塚宗重の軍に擄奪せられ、四郎の幻術によりて四郎と共に遁れ去る。後、四郎を救きて之と別れ、清治に逢はんとすして下る途に父を訪ふ。是時父は足立右馬允景久に召喚され、四郎の行方を訊問されし歸り自殺を決心せる折なりしが、更科それとも知らずして四郎と縁を切りしことを語る。父之を聞いて喜びしが、更科忽ち四郎の幻術に悩まされる。かくて後島山重忠に逢うて辨財天の注連繩を授かり、肥前國に下り四郎の據れる七草城に忍入り、四郎に見付けられて縛せらる。更科縛を切り矢を放つて敵情を清治に通知し武功を立つ。かくて重忠の媒酌によりて清治の妻となる(傾城鼻原峠合戦)

さりよう 左龍虎。明の逆臣李順天一味の徒にして、南京雲門關の守將なり。國性爺の關門を越ゆるを拒み、國性爺と戦うて敗死す(國性爺合戦)

さみ 岩木忠太兵衛の娘にして、出雲藩主の茶道指南役淺香市之進の妻なり。「こんざ」の條を見よ(鐘の権三重帷子)

さん 播州姫路本町米商但馬屋の手代清十郎の許嫁の女なり。清十郎を犯して失踪するや、おき比丘尼より清十郎を尋ねぬ出て、刑場に逢ふ(五十年忌歌念佛)

さん 京都四條烏丸の大經帥以春の妻なり。以春が下婢の玉に懸懸するを怨み、以春を奪めんとす玉の腰所と取替へて臥し、手代茂兵衛と思ひげなき木義に陥り、兩人相共に逐電する途に父母を訪ふ。父憐んで銀一貫目を與ふ。かくて兩人は母と被覺し、召捕らるる際、身寄を寄せしは丹波屋、召捕らるるに栗田口に刑せられんとせしを黒谷の東岸和尚に救はる(大經帥背腹)

さん 紙屋治兵衛の妻なり。「ちへま」の條を見よ(心中天狗巻)

さんきち 自然生三吉。幼名與之助。伊達與作・激野井の子なり。三歳にして父に別れ五歳にして馬追となり、十一歳の時丹波領主由留木侯の姫君江戸行き馬追に召され、姫君の前に道中雙六の戯をなし、母の激野井に邂逅して深く慕へど、激野井を母たるを明さず。三吉、姫君の馬を追うて関の宿に泊り、馬と與作を救喚され、姫君の金袋を盗みしを、夜驚の侍に見付けられて縛に就き、馬士八藏に預られ、額に疵を與うたるを憤怒して八藏を斬殺す。是に於て三吉の罪死刑と定まるや、激野井身を以て哀訴し、姫君の命によつて放逐せらる(舟波與作)

さんごへ 政山三五平。小倉壺九郎の妹婿なり。壺九郎江戸詰を終へて歸國するや、三五平眞若を隨りて、壺九郎の留守中にその妻お種の不義ありしことを諷す(堀川波鼓)

さんごへ 惣野三五兵衛。肥後熊本

さんざ 名古屋山三春平。六角頼賢の家老なり。同役不破道人の讒によりて浪人となり、京都島原の遊女葛城と馴染み、道人の子の伴左衛門を大門口に斬りしが、舞鶴屋の主人傳三の同情によつて殺人犯の罪を免る。また頼賢腹の子銀杏の前を狩野四郎二郎に媒約す。道夫其爲聖谷と共に山三を訴へ、伴左衛門を殺して其所持金三百兩を奪ひたりとなす。是に於て山三は伴左衛門を殺しし時、其所持金を屍の肺筋中に入置きし取出しして道夫に示す。爲に道夫却つて人を誣ふるの罪に處せらる(傾城反魂香)

さんたらう 三太郎。結屋徳兵衛の手代なり。徳兵衛の馴染遊女房より小箱銀一つを貰うて、房の來れるを口外せざるを誓ひ、また徳兵衛の女房辰より銀を貰うて命命を隠く(心中重井筒)

しえん 紫燕。江南の刀工陶民子の娘にして朱一貫の異父妹なり。福建の國守六安王の部將馬府官等の兵に擄はれて、朱一貫と共に煙筒より遁れ、夜道を辿りて芙蓉嶽に笠り軍衛者伍乘に便る(唐船新今國性爺)

しきたへ 敷妙。吉備武彦の妹なり。日

本武尊に隨行して筑紫に下り、神賢姫と稱して八十歳帥と婚儀を擧げ、慶所に於て鼻師を刺さんとて殺さる(日本武尊吾妻鑑)

しくれ 時雨。備前國兒島郡藤戸の浦の鹽燒藤太夫の娘なり。佐々木廣綱に搦められしを佐々木盛綱に救はる。盛綱が藤太夫を殺して海に沈むるや、時雨は母・姉と共に狂女となつて藤戸の浦の汐を漂ふ。是時廣綱來り盛綱の言付と偽りて時雨の母を奪去る。是に於て姉妹男装して葦簀となり、盛綱に近づいて矢を放ちし中ならず。母を尋ねて由比濱に逢ひ、佐々木高綱の妻となる(佐々木先陣)

しげいへ 鈴木三郎重家。紀州熊野八莊町の住人にして龜井六郎重清の兄なり。鳥羽の里にて重清の茶店に雇ひ、後白河法皇の頭陀修行し給ふに遇ひ、嘗て平重盛より托されたる黄金三千兩を獻すれども、法皇之を受取り給はる。義經に與へて軍資となすべしとて平家追討の院宣を賜はる。是に於て重清と共に義經を尋ね、三州矢矧の宿に遇うて之を傳ふ(孕常盤)

主君義經及び弟の龜井重清を養うて奥州に下る途中、三河國矢矧宿にて源瑠璃御前の絲竹の調を聴き、立寄つて一夜の宿を請ひ、淨瑠璃姫と共に鎌倉に下り、頼朝の御前にて梶原景時・景季を祈罵し、義經の冤罪を訴へて泣き且恨みしが頼家より慰められ、奥州に下つて重清に逢ふ。かくて後高館の戦に死す(源義經將系鑑)

しげきよ 龜井六郎重清。源氏の家太子なり。菟蓐豆腐を賣れる際半若の家來喜三太に遇ふ。また鳥羽の里に茶店を出して兄鈴木三郎重家に邂逅し、共に後白河法皇の平家追討の院宣を奉じ、三州矢矧の宿に半若を尋ねて之を傳ふ(孕常盤)

しげただ 高山重忠。北條時政が丙午生れの女は男に不詳なりと言ひし時、重忠之に答へて丙午生れの他の女を殺して崇を嫁ぐべしと言ふ。かくて後、由比濱に藤太夫の孫婿刑せられんとする場に臨み、丙午生れの女が夫に崇るといふ聲の更に根據なきを辨じて、幕婦の娘の待宵・時雨を佐々木盛綱・同高綱に嫁約す(佐々木先陣)

源頼朝より嫡子頼家養育の命を受け、古今の名將を養きたる繪障子を作りて頼家教育の資となす(曾伏會橋山)

重忠は智仁勇兼備の良將なり。曾伏二子が由比濱に引出されて首を刎ねられんとする場に來つて二子を救ふ。また大場三郎が百騎ばかりを率ゐて文豊の庵室に押寄せたる際、重忠匠付け上使と稱して三郎に閉門を命じ、鬼王兄弟をして股野五郎景久を殺さしむ(木領曾伏)

源頼朝より梶原景季と共に義經主従の首實験を命ぜらる。是時頼朝前に遇ひ、其心中を憐しんで義經の首を渡し、屢首を首實験に持出でしが、景季に不審を立てられて之と争ふ(大磯虎稚物繪)

科には江の島辨財天より授かりし緋袴の注連繩を與へ、琵琶姫には高山家傳の陣笠を與へたり。かくて兩女及び足立景久・葛西清治が七草城を攻めて遂に之を陥れ武功を立つるや、重忠金の采配を清治に與へて葛西家を興さしめ、琵琶姫と景久、更科と清治の婚儀の媒約をなす(傾城島原合戦)

しげつぐ 横山三郎重次。小栗兼氏を惡み之を縛して山形兵衛に渡さんとす。兼氏怒つて縛繩を切り、山形兵衛を殺す。重次益兼氏を惡み、野馬兎尾毛をして兼氏を殺さしめんとしてを推殺す。遂に親兒を伴ひ兼氏の館を訪うて之を殺す。かくて後頼朝及び藤原を刺さんとて殺さる(當流小栗判官)

しげとも 榛谷四郎重朝。梶原平次景高一味の徒なり。二宮安清が富士裾野へ注進の早打を命ぜらるるや、己之に代り行かんと争つて朝比奈義秀に毆打せらる(曾伏會橋山)

しげなり 義輪彌五郎重成。藤原忠文の郎黨なり。主の智謀淺きを知り、若し秀郷との智謀競ふに負はれし時は、直に秀郷を斬つて自刃なされと勸む。後、百足に變装して惡事をなしたりしが、秀郷の郎黨鐵綱丸に殺さる(傾城懸物繪)

しげもり 小松内大臣平朝臣重盛。賢明仁慈の徳に富む。養和元年九月九日建禮門院より北に荻野の館あるやち甲越せり。其奉客使に獻上の山雀を持たせて遊す。或日加賀郡司師高が建禮門院の使者と稱して來り、左京之進義次を死罪に行ふべきを命す。重盛不審に思へども門院の命令なれば陸方なくつて首桶を入れ、石を添へて重りとなし、齋藤左衛門尉勝頼及び越中次郎兵衛盛次に其首桶を持たしめて建禮門院の許に遺はす(娘歌かるた)

平清盛の長子なり。父の專横を憂ひ、死を熊野權現に祈つて病を得。清盛不醫の藥を勸めたれど之を斥けて死す(孕常盤)

重盛病篤し。平家の一門之を憂ひ、相謀りて重盛の心を慰めんとす。重盛乃ち田植の儀を所託す。是時熊野本官の別當來つて重盛に謁し、白木箱を差出して曰く、本官の社壇内にこの箱を隠してありきと。重盛命じて其箱を開かしむれば、重盛の容貌を驚きて之を咒ふ。頼朝の隨文を納めたり。重盛驚つて曰く、我病を得たるは、父の惡心を矯むる能はずんば我命を取り給へと熊野權現に立願せしに由る。然るに我死なば頼朝は隨成就と喜ばんことの愚やな。よしよし盛衰は天にあり恨むまじ。時こそ早れ辨作を見物せんと宣ひて田植を御覽あり。早乙女等夫返せんと返せし唄を歌うて挿袂す。重盛之を聞き彼等の心中を亂さる。彼等乃ち我夫或は我子が常盤に呼ばれて其儀

しげのゐ 滋野井。丹波領主由留木侯の

行方不明となる由を言上す。是に於て重盛、彌平兵衛宗清に命じて常盤の舉動を取調べしむ(全家女護衛)

しげやす 秩父六郎重保。畠山重忠の子にして、曾我二子に同情せり。或夜朝比奈義秀と共に大磯遊廓に虎少將を揚げて遊興し、父の命と稱して筋成に賭る黄金五十枚を虎に依託したり。また頼朝の命により、梶原虎太と共に曾我老母の宅を訪うて時致勘當の貨香を見届け、且曰く五郎は父母なき孤子なれば養子にされたしとて、母子の盃を取替はさしめたり(曾我虎が懸)

じじゅう 侍従。太妻又五郎の女にして吉田兼好に従つて和歌を學ぶ。兼好の言付けにより、鹽谷判官高貞の奥方の美人なるを高師直に語りて、師直が卿の官に懸想せる心を釋せしむ。師直清水寺に詣でて高貞の奥方を見、直に侍従を介して高貞の奥方に口説かしむ。然るに侍従は其命を果さずして遁走せしかば、師直に捕へられて殺さる(兼好法師物語見)

しそうれつくわうてい 思宗烈皇帝。大明十七代の帝王なり。逆臣李滔天を借じ、遂に李滔天及び驍胆兵に圍まれて弑せらる(國性流合戦)

しちざあもん 手島屋七左衛門。大阪天満町の油商なり。五月節句の前夜懸取に出でたる留守中、妻お吉が河内屋兵衛に害せらる。七左衛門亡妻の三十五日の法會を齎る際、鼠暴れに血染に染みたる紙片を落す。七左衛門之を拾ひ見て殺害人の與兵衛なるを知るに至り、與兵衛を捕へて殺打す(女殺油地獄)

しちらう 瀬尾七郎。平家に仕へ遠州朝見湯の番所に勤む。元寛を殺さんとして暴風怒濤に吹捲かる(頼朝伊豆日記)

しづか 静御前。源義經の妾なり。義經主従の首領ありと聞き、畠山重忠に逢うて哀訴す。重忠其心中を憐んで義經の首を渡す。静喜んで其首を携へ歸る途に梶原の郎黨番揚の國久に捕へられしを、畠山の家本土田近經に助けられて重忠の奥方に預けらる。やがて磯野四郎静を迎に來る。静乃ち重忠の恩を謝し暇を告げて歸る途中、また國久に捕へられんとせしを小栗郡司に救はる。是より尼となつて郡司の妻と同棲す(大磯虎物語)

義經に連れられて攝州尼が崎大物浦より乘船せしが、暴風に遭ひ吹き流されて住吉浦に漂着し、これより吉野山に分入り、義經と別れて都に歸らんとし道途を迷ひ、山中の祠堂にて花紫若紫に巡り遇ひ、相共に吉野に引返して義經に逢ひしが、義經に識されて再び名残を惜んで別る(吉野忠信)

平大納言時忠の嫡なり。平家滅亡後源義經の妾となり、義經に従ひて北野天満宮に詣つ。この夜土佐功高俊に堀河の邸を襲はれ、嚴防嚴究く力む。義經都を聞かや、靜別れて鞍馬山へと志し行く途中、北條暁野にて日まきに暮れ、祇玉祇女の庵室に逗留す。義經の郎黨喜三太尋ねて來る。是時梶原の兵に圍撃され、捕へられて鎌倉に赴く道に大洋二郎の家に入りて男子を鎌倉に託す。景季その嬰子を殺さんとするを、二郎の厚情に倣つて救はれ、之より二郎に連れられて奥州に下り、藤原季衡の館にて義經に逢ふ(藤原内膳)

しつたたいし 悉達太子。父は中印度

迦毗羅伐捺城城主淨飯王にして、母は摩耶夫人なり。太子は四月八日王宮歡喜園の産家に於て母體の右脇より生れ給ふ。その時異香薫じ三十二相の尊容備はり、天上天下唯我獨尊、無量生死於今盡矣と稱す。習はずして諸聖に達し、佛へ歸して六十四部の諸論に通じ、一切智を備へられたるによつて悉達太子と名づく。隣邦拘利城主の婿阿難陀羅女を娶り、一子難離羅を致す。太子十九歳にして深く人生の無常を觀じ、二月七日の夜過て丑三つ時東邊を馳じて馬の口取らしめ、竊に王宮を出でて檀特山に至り、此所より軍塵を歸し、單身乞食の姿と變じて名を瞿曇沙彌と改め、阿難陀仙人に就きて難行苦行を積み、遂に忽然大悟し給ふ。それより頭陀して須達長者の家に住かる。須達長者は提婆達多の法を信じて世尊に反對す。世尊乃ち佛法の不思議を示し給ふ。かくて大乗布教五十年、狗戸那揭羅城外跋提河畔沙羅雙樹下に於て最後の遺訓を示し、二月十五日寂滅として涅槃に入り給ふ。釋尊八十一(釋迦如來誕生會)

しづは 賤機。蘇民將來の妻なり。一字字賀を夫の兄且將來の養子に遣はせしが、且且の貪欲暴戾なるを怒つて之を取戻す。後、且且が其父食保の長を殺したること發覺するや、夫と協力して且且將來を殺す(日本振袖帖)

しのめ 東雲。京三條鳥丸帽子折五郎太夫の嫡なり。牛若が鳥帽子を簪ひに立寄りたるを見て懸想し遂に契る。後、牛若に扮して身代りたらんとせしを、彌平兵衛宗清に救はれて牛若の跡を追ひ、田村の官居にて牛若と共に平家の將監物太郎頭方の軍と戦うて之を破る(源氏烏帽子折)

しのぶのまへ 忍前。梶三郎忠衛の妻にして佐藤次信の妹なり。武藏坊辨慶が金の無心に來れるを引見せる際、忍衛外郎が金の無ならずも態と義經を捕獲し辨慶を難す。忍の前は夫の心事を知らず、堪へかねて諷言し怒に觸れ、花石乙の姫の二子を連れて追出さるるに至る。かくて後秀衛一周忌善所無量光院新羅堂に參詣し、其事情を語り夫を憤物を乞ひ、義經に遇りて路傍を語り夫を憤怒せしが、忍衛討死して始めて夫の心を知り、錦戸太郎衛尉の兵と奮戦して本吉四郎を射殺し、尋いで我子の乙の姫を刺して夫の冥途の道連れたらしめ、花石を伴ひて高麗に行き義經の軍に投ず(源義經將義經)

じぶごや 淨瑠璃御前の侍女なり。淨瑠璃御前と牛若との情事の媒介をなす(孕婦)

淨瑠璃御前に従ひて峯の樂師の笹谷に贈れたるを、藤木に見付けられて將に斬られんとせしが三條の吉次信高に助けらる。後牛若に逢ひ淨瑠璃御前の死を語りて哀悼す(十二段)

淨瑠璃姫の死後佛に歸依して尼となり、姫の冥福を祈る(源氏宿願)

じぶざう 「ひろちか」を見よ。

しへい 左大臣藤原時平。普承相を猜み、唐裴文雅に暗略を獻りて之と心を合せ、道徳を譏奏して陥れしが、後其報により雷神に打たれて死す(天神記)

しま 阿島。大阪堂島新地天満屋の遊女なり。長柄の百姓市郎右衛門と馴染む。嘗て明石の貞と云ふ客に連れられて芝居見物に行き、歸途舟に乗りて淨瑠璃を語る。市郎右衛門陸より其舟を注視す。貞之を見覺めて市郎

右衛門と一問者を起ししが、お島の鞍馬によ
り二事なきを得たり。市郎右衛門・弟の善次
郎の爲に冤罪を責うて難儀の身となるや、お
島も共に憂ひ、市郎右衛門と最期の宴を近江
屋に張り、歸途善次郎に遇うて怨言を述べ、
天満屋に歸りて暗に別を告げ、夜更けて市郎
右衛門の戸外に咳する聲を聞き、窓より鏡を
出して其影を映し、無音の中に心中を示し合
うて自刃し、男の魂魄と互に相伴うて中有の
道に彷徨す(二枚絵)

(序云、實説は寶永二年十一月十六日情死、
しまぬし 苜木鳥主。秦川勝を訪うて其
妻に面談し、川勝が天皇の軍に關するやう懇
望せしかど、川勝遂に肯ぜず。是に於て戰場
に相見ゆることを約して別れ、聖徳太子の軍
に屬して物部守屋の副將弓削勝海と戦ひ、冤
戦克く勅めしが不幸にして流矢に當る。乃ち
政若・都賀若の二子に教訓を遺して歸る。時
に歳五十一(聖徳太子繪傳記)

じやうかん 山崎淨閑。山崎次兵衛
の父なり。與次兵衛冤罪を蒙つて家に幽閉せ
られたる時、淨閑・梶田治部右衛門と將案す。
治部右衛門將案に託して、淨閑より謝罪名を
出し與次兵衛を助くべきを願ふれども、淨
閑難する氣色なし。後淨閑意を決し、與次兵
衛を遊女吾妻と共に逃げ走りしむ(盜門松)

じやうじ 佐藤庄司。源經經に男牛の名
馬を贈り、繼信・忠信の二子をして義經の軍
に従はしむ(十二段)

じやうしう 安藤左衛門入道聖秀。
北條高時の部將にして義に厚し。鎌倉將軍成
良親王に禮を盡したる爲に五大院右衛門宗重
と口論するに至りしが、高時の仲議にて宗重

の嫡子宗房と聖秀の娘繪合姫との婚約をな
す。然るに繪合姫が大輿に禮せしを父見咎め
て怒り、繪合姫を勸奮して宗房との婚約
を破り、以て暗に里見閑助の妻たりしむと
し、自らは病と稱して閉居す。或日家士新五、
新六と御書して慰める際、繪合姫來つて義貞
の手紙及び白旗を差出し、義貞に屬するやう
懇請す。聖秀乃ち義を思ひ娘を思ひ、我首を
携へ歸つて義貞の引出物になすべしとて自刃
す(相模入道千正)

しやうしゆん 土佐坊昌俊。源朝朝の
家士なり。頼朝の命を奉じ、北野天神の神樂
堂に隠れて義經を狙ひしを辨慶に捕へられて
義經の前に引据えらる。昌俊乃ち二心なきを
誓うて放免せらる。この夜義經の居所掘河の
邸を襲撃して喜三太に破られ、辨慶に捕へら
れて伊勢三郎に首を刎ねらる(藤靜胎内書)

しやうとくたいし 聖徳太子。用明
天皇の皇子にして佛法に師依し給ふ。大連物
部守屋の母日益が佛法を罵りし時、太子即ち
不思議を見せ給ふ。後、夢殿にて修行せられ、
攝州難波の里に大願堂建立の志ありて、梵王
宮を巡りて圓形を見給ふ。かくと和州大宰蘇
真別に降り、跡見赤檜等を率へて守屋を河
内國稻村城に攻めて之を滅し給ふ(聖徳太子)

じやうるりごぜん 淨瑠璃御前。三
河國矢矧宿の長者の女なり。源牛若が三條吉
次信高に連れられて奥州に下るに當り其家に
宿る。淨瑠璃御前牛若を慕ひて之と契る
(孕常盤)

侍女と共に琴を彈する際牛若の笛の音を聞き
て慕ひ、遂に契を結び、藤太に追捕はれて峯の

薬師の笹谷に住居せしを、藤太に横暴嚇ま
れて口説かれしかども、其意に従はずして斬
らる。牛若奥州割を奉るに西上の途次姫の墓
を吊へば、墓石割て姫の姿現はれ、瑠璃光
如來と變じ給ふ(十二段)

しやか 「しつたらし」を見よ。

しやのく 車匿。悉達太子が竊に王宮を
遁出で給はれし時、車匿難歩駒を牽出し太子
を乗せて檀特山に至る(釋迦如來誕生會)

しゆいつき 宋一貴。江南の太守繼體王
の落胤なり。王の病死後母と共に刀工陶民子
に養はる。或日道士伍乘來つて宋一貴を見
し、大貴人の相あるに驚く。覆刺のことより
父母非業に死するや、宋一貴は妹を拉して遁
れ、苦學繼に伍乘を拜へて上り、伍乘を軍師
として義血を擧げ、福建の國守六安王を攻め
て之を滅し、部下に擁せられて順成王と號す
(唐船新し國性)

しゆびん 守敏。西寺の僧にして空海の
法敵なり。藤原隆盛が母を弑して遁れ來る
を庇護して寺内に居らしむ。空海以呂波の
前連兼に乗つて飛行せるを見、之を咒詛して

以呂波の前を地に落ししが、空海の法力によ
つて再び連兼に縛して去る。守敏はまた朝廷
より雨乞の新禱に召され、空海を咒詛して空
海の法力に負け、己が惡事を口走つて悶死す
(以呂波物語)

しゆん 和泉國水間の里の農夫佐治右衛門の
娘にして清十郎の妹なり。清十郎罪を得て遁
走するや、おしゆん比丘尼となりて清十郎の
行方を尋れ、清十郎の刑せらるる場に巡り遇
ふ(五十年忌歌念佛)

しゆんくわん 俊寛僧都。成經康頼
等と共に平氏を亡せんことを謀りしと發覺
して、成經・康頼と共に鬼界島に流され、配所
にあること二年に及ぶ。或日舟左衛門尉基
康・妹尾太郎兼康の兩人召還の使者となつて
島に來る。俊寛は小松殿能登殿の情によつて
船前國まで歸送するを赦さる。俊寛婦し涙
に咽びしが、是時成經の愛人千鳥同乗を懇請
す。俊寛乃ち千鳥の心中を憫み、己の代りに
千鳥の乗船を請うて拒絶され、怒つて兼康を
刺して俊寛一人島に取殘さる(平家女護島)

じゆんぢだいらわ 順治大王。繼體
國主なり。大明を破り思原親皇及母及帝の
寵姫華清夫人を殺して南京城に據りしが、國
性爺の軍に破られて縛に就き、鞭たれて本國

を庇護して寺内に居らしむ。空海以呂波の
前連兼に乗つて飛行せるを見、之を咒詛して

に放逐せらるる(國性爺合戦)

順治大王再び攻寄せ、大明を破つて都を南京に奠め、舊怨を報ずと雖も、國性爺東嶽島に據れるを憂ひ、露計を廻らせども效無く、東嶽島に攻寄せ破れて滅ぶ(國性爺後日合戦)

しゅんぼ

春市

伊東の一族等石橋山に

を狩を催しし時、稻柴茂れる中より春市の上らばひ出でたるを捕へられ、將に澤野ならんとするを頼朝に助けられ、法眼春樂に救はれて其弟子となる。春樂が伊東祐親の女藤の前を預り、春樂を服用せしめて之を殺さんとし、其藥の調合を春市に命ず。春市之を拒みしが春樂より思知らずと罵られて意を決し、遂に藤の前を毒殺す。かくて後頼朝より義法と名づけられて其侍醫となる(源氏冷泉節)

しゅんらく

生田法眼春樂

源氏の臣

にして醫師なり。伊東祐親の女藤の前の病氣を診察し、其惡阻なるを知れと頼朝の胤を宿せるものと察し、態と病名を案じて藤の前を預りしが、祐親が藤の前を平家の侍山木判官兼高に嫁せしめんとするや、春樂は源氏の面目を保たしめんとし、弟子の春市に命じて藤の前を毒殺せしめ、頼朝を助け北條時政に依らしむ。後、頼朝其忠節を思ひ醫法と名づけて侍醫となす(源氏冷泉節)

じよきち

「トヘス」を見よ。

じよせい

小西如清

堺の樂種商にして

小西翁十郎の父なり。眞柴肥前大領久吉住吉詣の時、天下茶屋に茶屋を設け、千の利休をして久吉を囁はしむ。如清、久吉より朝鮮地圖を尋ね出せとの命を受けて、堺乳守の遊女小儀が所持せるを言上す。後、久吉大佛殿を建立して其供養の日、曾呂利休と共に咄

如となつて席に臨む(本朝三國志)

しらう

磯野四郎

靜の弟なり。畠山重

忠を訪うて靜を連れて歸る途中、三島の宿にて發亂に罹る。靜樂を眼せしめんとして小柴郡司に湯を請へば、郡司も發亂に罹れり。四郎乃ち靜をして靈藥を郡司に與へしめ、自らは服用せしめて死す(大権虎雜物語)

じらう

澤湯二郎

平惟茂の家士なり。

禁中の變化退治に従ひて武功あり。或日梅の井が惟茂の邸を訪ふ。二郎引見して用向を問へば、惟茂深に既に玲瓏君と婚約あるに、その上に世繼姫をもお請けなされしこと合點し難く遁返答取りたしとのことに、二郎其取次に窮し遁辭を設けて逃げむ。梅の井に追跡されて惟茂の家に轉げ込む。かくて後、玲瓏世繼(二姫)の供し惟茂を尋ねて信濃に下り、戸隠山の惡鬼退治に武功を立つ(槍狩)

じらう

大津二郎

盜賊磨針太郎の子なり。

幼時玉生小娘と稱し、大盜賊熊坂長範の手となる。父が義經に殺されて、玉生小娘は大津二郎と改名して大津松本に住し、矢獵の浦の渡守となる。或日舟中の客僮の語に、己が子の育たぬ所以は父が常盤を害したる罪業の身に報れたるものと聞き、せめても靜を助け常盤の怨恨を看めんと思ふ折から、梶原景秀が靜を携來つて泊す。その夜靜男子を分婬す。景季の腹を殺さんとす。是に於て二郎は我妻の腹を裂いて子を引出し、之を靜の子の身代りたらしめ、靜を連れて美濃國青野が原に至つて、景季の邸裏に出遇ひ、之を斬つて義經追討の院宣を奪ひ、奥州に下つて義經に謁す(猿蓑胎内雀)

しらぎく

白菊

足利十三代の武將義輝

の侍女なり。御靈所に降して賀茂社に詣づ。後、義輝の邪穢の刃にかかつて死し、其靈靈足利義昭の夢に現はれ、賤志の眼をむいで義輝を追ふ(津國女夫池)

しらべのひめ

丹波の一城主由留木殿の姫

君なり。「さんきち」の條を見よ(丹波與作)

しらさえもん

奥田屋四郎左衛門。

筑前博多御町の遊樂奥田屋の主人なり(博多小女郎被せ)

しろう

狩野四郎二郎元信。

狩野祐勢の嫡男なり。文龜年間夫崎官の御告により、奥州武隈の松本兼かんとして越前氣比浦に赴く。時に土佐將監光信の姫光遊女となり、遊山と名乗つてこの地に在り。四郎二郎、遊山に遇つて武隈の松本の祕傳を授かり且之と契る。後、江州高島郡大塚大夫頼賢の家老名古屋山三春平の推薦によつて同家に仕へしが、道大、粟谷等に憎まれ、弟子雅樂介と共に遁れて、土佐將監光信の弟子又平の宅に潜む。或日春平島原大門口にて道大の子の伴左衛門を斬る。是時遊山は官と改稱し、遣手となつて島原に在り。春平が四郎二郎の恩人たるを知りて其殺人の罪を救ふ。然るに春平は四郎二郎と官との情交あるを知らず、爲に四郎二郎をして頭懸妾の娘領春の前との婚約をなさせしむ。元信これが爲に失戀して憂死し、其魂魄留りて官と契る。大永七年四郎二郎大管倉の屏風に畫き、從四位下越前守に任ぜられ、光信を推舉して共に納所に出仕す(傾城反魂香)

しろたいふ

白太夫

博多に住し、荒藤

太十六夜小梅の父なり。老眼にして物見えず。小梅を伴ひ牛に乗つて遊山に出で、荒藤

太の不孝を歎き、菅丞相の流人となり給へるを悲しみ、小梅に早く夫を持つべきを語りしを、荒藤太に聞かれて殴打せられ妻兼行に助けらる。かくて後荒藤太に殺せんとしたる時、十六夜の魂魄留つて百人力となり荒藤太を撲倒す(天神記)

しろたへ

白妙

伏見の里に住し、源氏

の臣藤九郎重長之妹にして平氏の侍衛平兵衛宗清の妻なり。或雪夜常盤御前が三人の子を伴うて立寄り一夜の宿を頼む。白妙之を泊らす能はざるを悲んで懇に断る。後、義經に屬して平家の將監物太郎頼方の軍を田村社に破る(源氏烏帽子折)

じろへゑ

二郎兵衛

大阪本町新物店

屋の手代なり。同家のお針女きさと相愛す。菱屋の別家由兵衛ききに横暴慕し、きさの親太郎三郎の無筆なるに乗じ、これを欺いて娘を由兵衛に與へんとの證文を代書して之に捺印せしむ。きさ二郎兵衛の證文を奪はんとし、主人に拘束する間に主人の鍵を奪うて由兵衛に藏めたる證文を破り、由兵衛に見付けられて難儀に遭ひしを、菱屋の隠居眞法の温情の説諭によつて改心を誓ひし。其實かく簡單な縁でなく、且破りし證文をよく見れば、七貫五百目の家賃證文なるに當惑し、我運命の拙きを呆て死を決し、おきさと共に今宮黒黒須の森に走つて兩人縊死を遂ぐ(實説は寶永六年秋、二郎兵衛行年二十一(今宮)

しろあもん

菱屋四郎右衛門

大阪

本町新物店菱屋の主人なり(今宮心中)

しんげん 武田大膳大夫時信入道信

玄居士

甲州の國守なり。上洛の歸途大

津より越後國守長尾輝虎と同船す。折しも甲

州より使者來つて、信玄の子勝頼と謙虎の娘
衛門姫との情事を告げたることより甲越二家
の不和となる。信玄三州半徑の浪士山本勘介
を其草薙に訪ひ、禮を盡して主従の約をな
す。之より越後の軍と第一戰に勝利を得。信
玄天目山に居を構ふ。家臣高坂政信、原島後
御前に出でて、勝頼・衛門姫の婚儀を懇請し
て罷されず。或夜政信出でて信玄を害せんと
す。勝頼躍出でて之を捕ふれば、かねて恨を
抱ける村上義清なりしかば直に其首を刎ぬ。
信玄其武功を賞して不興を許し、勘介の忠節
によつて謙虎と和す(信州中島合戦)。

甚五郎。大阪長町に住し、
半七の義伯父なり(長町女腹切)。

新七。江戸屋勝二郎の手代な
り。主人の妻妾放逸を諫め、同僚の發兵衛に
招かれて追出さる。其後も屋勝二郎を諫めて
用みられず。勝二郎資産を蕩盡して官より追
放され、奈良に落ち行くや、新七更に忠勳を忘
らす。官新七の忠義に感じて勝二郎の罪を赦
す(寢廻出世補徳)。

岩木甚平。岩木忠太兵衛の子
にしておさきの弟なり。おさきが不義を犯し
て誣落したる行方を尋ね、おさきに積鬱鬱し
たる川御伴之丞を斬り、おさきの夫淺香市之
進と連立つて、山城伏見町京橋の上にて女敵
討の助勢をなす(鐵籠三重帷)。

下婢又は遣手の名を普通通に杉とひひ、
鐵籠三重帷で、曾我五人兄弟、長町女腹切
心中天網島などの中に見えてゐる。

伊駒宿禰。山彦王子の道士な
り。玉世姫の邸を襲つて桶敷久馬平と戦ひ、
また梅井連伊勝船と梅井豊後國磯野長右の家

に行きて勝船に追拂はれ、百島木夫に捕縛せ
らる(用明天皇職人鑑)。

伊豆二郎祐兼。工藤左衛門
尉祐經の弟なり。建久四年五月二十八日祐經
が曾我三子に殺さるるや、祐兼乃ち曾我三子
の思者虎少將を捕め、朝比奈義秀に痛罵せ
らる(加増曾我)。

伊東九郎祐清。伊東次郎祐
近の子なり。亡兄河津祐重の一周忌に頼朝等
を招きて追善を誓ふ。祐近在頼朝を殺さんと
するや、祐清乃ち頼朝にその實を語つて北條
時政に頼らしめ、八重姫の生める頼朝の子の
千鶴九がどきの淵に沈めらるるを救はんと
して馳付けたれど及ばず。是に於て八重姫に
頼朝に逢ふべきを諭して金を與へ、自らは忠
孝の義を全する能はざるを悲んで自刃す
(頼朝伊豆日記)。

丹波柏原の農夫にして
大經帥以春の手代助右衛門の従弟なり。以春
の妻おさんと其子代茂兵衛とが不義を犯して
身を害すや、助作はおさきの銀八百日を預
りて返さず。且兩人を官に訴へたり(大經帥
替唐)。

伊東祐重。河津三郎祐重とも
いふ。桃節句の日平宗盛の館に伺候し、朝顔
の携へたる文よりして工藤祐經・宗盛と一問
答を起し、心ならずも朝顔を刺す。その夜祐
野と密會せるを祐經に發見せらる。かくて
後、祐野と共に東路に下りしが、赤澤山にて
近江小幡太八幡三郎に射殺さる(本領曾我)。

赤澤山にて狩獵の歸途
工藤祐經の爲に射殺さる(頼朝伊豆日記)。

伊東次郎祐近。伊豆の豪族

なり。文覺上人を護送して配所に遷し、佛門
に歸依して禪門淨心といふ。後室の言を聽い
て八重姫の生める頼朝の子千鶴九を松川の奥
とどきの淵に沈め、頼朝をも害せんとしたり
しが、後、頼朝に攻められて敗る(頼朝伊豆
日記)。

工藤左衛門祐經。源頼朝の
權臣なり。畠山重忠と共に頼家扶育の命を受
け、白鹿の毛にて薙きたる鬚は物言ふとて朝
比奈義秀と口論す。また婚禮の夜石打に托し
て祐經を殺さんとして時宗に懲らさる。物言ふ
給を義秀に催促されて、乃ち河津三郎と股野
との相撲に河津の預けたる給を出し、其後方
に八幡三郎を墮して物言はしめたるを義秀に
觀破せらる(曾我五人兄弟)。

頼朝に從ひて富士裾野の狩に行き、建久四年
五月二十八日の夜曾我三子に其處所に斬入ら
れて殺さる(百日曾我)。

伊藤祐親に所領を奪はれたるを遺恨に思ひ、
祐親の子の祐重を敵視したり。偶朝嗣が平宗
盛の館に來て、病氣の變妾兼野の老母の使者
と稱し、老母の病氣に托して兼野の暇を請へ
るとき、其携へたる文に頼朝・河津などの文字
ありしかば祐經之を見發めて難じ、其夜兼野
に欺かれて名劍友切丸を奪はる。かくて後近
江小幡太八幡三郎に命じて伊豆赤澤山にて
祐重を射取らしめ、なほ祐重の二子を頼朝に
訴へ、二子を捕へて中比呂に引出し、其首を
刎ねんとして畠山重忠に阻まる(本領曾我)。

井原經景が頼朝より舞鶴の紋を拜領したるを
幸に、朝比奈義秀の舞鶴の紋を改めさせべき
を言上して義秀と論争す。經景が舞鶴の紋所
披露の祝宴に大儀の遊郎那郎屋に招かれて、

其歸途義秀に脅されしが遂に建久四年五月二
十八日の夜、富士裾野の假屋にて曾我三子に
殺さる(曾我扇八景)。

朝使中納言藤原定家卿が曾我五郎の力薦を見
たしと察みしを、祐經之を遷して御所の五郎
九を推擢す。建久四年五月十五日頼朝の御詔
と稱して、曾我三子の姉二宮安清の寮を鎌倉
に召出し、富士の御狩の間曾我の老母と共に
人質とせんせしを畠山重忠に阻まる。この
月二十八日の夜富士裾野の假屋にて曾我三子
に殺さる(曾我虎が屠)。

朝比奈義秀が元服の祝儀を箱根親現にて取行
ふや、祐經、來會し親王を侮辱し、箱王に下
獄・棄を奪はれて口論せるを義秀に罵られ、箱
王に下獄にて毆打せらる。かくて後頼朝に從
ひて富士裾野に行き、假屋に大儀の遊女虎御
前を招寄せ、曾我祐成・魚の料理を命ず。建
久四年五月二十八日大膳内と酒宴して、應に
就くや、曾我三子に斬入られて殺さる(加増
曾我)。

建久四年頼朝に從つて富士裾野に狩し、遊女
龜菊を妾席に侍せしめ、曾我三子を騎馬に乗
らしめて負傷せしめんとしたりしが、其夜遂
に曾我三子に殺さる。時に五月二十八日(曾
我會椿山)。

後醍醐天皇。後醍醐天皇の御孫に參興し、北條相模人邊を討滅せし
る。義朝の重臣石見守中原相模人邊に内
應し、茶會に托して己が邸に實朝を誘引して
殺せんとす。實朝幸じて免れ落ち行く途に八
瀨の里にて菊姫に遇ひ、鞍馬路を尋ねて其家
に泊す。其夜中原等に攻寄せらる。實朝奮闘
したれども衆寡敵せず、搦められて六波羅に

日野中納言資朝。後醍醐天
皇の御孫に參興し、北條相模人邊を討滅せし
る。義朝の重臣石見守中原相模人邊に内
應し、茶會に托して己が邸に實朝を誘引して
殺せんとす。實朝幸じて免れ落ち行く途に八
瀨の里にて菊姫に遇ひ、鞍馬路を尋ねて其家
に泊す。其夜中原等に攻寄せらる。實朝奮闘
したれども衆寡敵せず、搦められて六波羅に

日野中納言資朝。後醍醐天
皇の御孫に參興し、北條相模人邊を討滅せし
る。義朝の重臣石見守中原相模人邊に内
應し、茶會に托して己が邸に實朝を誘引して
殺せんとす。實朝幸じて免れ落ち行く途に八
瀨の里にて菊姫に遇ひ、鞍馬路を尋ねて其家
に泊す。其夜中原等に攻寄せらる。實朝奮闘
したれども衆寡敵せず、搦められて六波羅に

日野中納言資朝。後醍醐天
皇の御孫に參興し、北條相模人邊を討滅せし
る。義朝の重臣石見守中原相模人邊に内
應し、茶會に托して己が邸に實朝を誘引して
殺せんとす。實朝幸じて免れ落ち行く途に八
瀨の里にて菊姫に遇ひ、鞍馬路を尋ねて其家
に泊す。其夜中原等に攻寄せらる。實朝奮闘
したれども衆寡敵せず、搦められて六波羅に

日野中納言資朝。後醍醐天
皇の御孫に參興し、北條相模人邊を討滅せし
る。義朝の重臣石見守中原相模人邊に内
應し、茶會に托して己が邸に實朝を誘引して
殺せんとす。實朝幸じて免れ落ち行く途に八
瀨の里にて菊姫に遇ひ、鞍馬路を尋ねて其家
に泊す。其夜中原等に攻寄せらる。實朝奮闘
したれども衆寡敵せず、搦められて六波羅に

日野中納言資朝。後醍醐天
皇の御孫に參興し、北條相模人邊を討滅せし
る。義朝の重臣石見守中原相模人邊に内
應し、茶會に托して己が邸に實朝を誘引して
殺せんとす。實朝幸じて免れ落ち行く途に八
瀨の里にて菊姫に遇ひ、鞍馬路を尋ねて其家
に泊す。其夜中原等に攻寄せらる。實朝奮闘
したれども衆寡敵せず、搦められて六波羅に

日野中納言資朝。後醍醐天
皇の御孫に參興し、北條相模人邊を討滅せし
る。義朝の重臣石見守中原相模人邊に内
應し、茶會に托して己が邸に實朝を誘引して
殺せんとす。實朝幸じて免れ落ち行く途に八
瀨の里にて菊姫に遇ひ、鞍馬路を尋ねて其家
に泊す。其夜中原等に攻寄せらる。實朝奮闘
したれども衆寡敵せず、搦められて六波羅に

日野中納言資朝。後醍醐天
皇の御孫に參興し、北條相模人邊を討滅せし
る。義朝の重臣石見守中原相模人邊に内
應し、茶會に托して己が邸に實朝を誘引して
殺せんとす。實朝幸じて免れ落ち行く途に八
瀨の里にて菊姫に遇ひ、鞍馬路を尋ねて其家
に泊す。其夜中原等に攻寄せらる。實朝奮闘
したれども衆寡敵せず、搦められて六波羅に

日野中納言資朝。後醍醐天
皇の御孫に參興し、北條相模人邊を討滅せし
る。義朝の重臣石見守中原相模人邊に内
應し、茶會に托して己が邸に實朝を誘引して
殺せんとす。實朝幸じて免れ落ち行く途に八
瀨の里にて菊姫に遇ひ、鞍馬路を尋ねて其家
に泊す。其夜中原等に攻寄せらる。實朝奮闘
したれども衆寡敵せず、搦められて六波羅に

日野中納言資朝。後醍醐天
皇の御孫に參興し、北條相模人邊を討滅せし
る。義朝の重臣石見守中原相模人邊に内
應し、茶會に托して己が邸に實朝を誘引して
殺せんとす。實朝幸じて免れ落ち行く途に八
瀨の里にて菊姫に遇ひ、鞍馬路を尋ねて其家
に泊す。其夜中原等に攻寄せらる。實朝奮闘
したれども衆寡敵せず、搦められて六波羅に

日野中納言資朝。後醍醐天
皇の御孫に參興し、北條相模人邊を討滅せし
る。義朝の重臣石見守中原相模人邊に内
應し、茶會に托して己が邸に實朝を誘引して
殺せんとす。實朝幸じて免れ落ち行く途に八
瀨の里にて菊姫に遇ひ、鞍馬路を尋ねて其家
に泊す。其夜中原等に攻寄せらる。實朝奮闘
したれども衆寡敵せず、搦められて六波羅に

日野中納言資朝。後醍醐天
皇の御孫に參興し、北條相模人邊を討滅せし
る。義朝の重臣石見守中原相模人邊に内
應し、茶會に托して己が邸に實朝を誘引して
殺せんとす。實朝幸じて免れ落ち行く途に八
瀨の里にて菊姫に遇ひ、鞍馬路を尋ねて其家
に泊す。其夜中原等に攻寄せらる。實朝奮闘
したれども衆寡敵せず、搦められて六波羅に

日野中納言資朝。後醍醐天
皇の御孫に參興し、北條相模人邊を討滅せし
る。義朝の重臣石見守中原相模人邊に内
應し、茶會に托して己が邸に實朝を誘引して
殺せんとす。實朝幸じて免れ落ち行く途に八
瀨の里にて菊姫に遇ひ、鞍馬路を尋ねて其家
に泊す。其夜中原等に攻寄せらる。實朝奮闘
したれども衆寡敵せず、搦められて六波羅に

日野中納言資朝。後醍醐天
皇の御孫に參興し、北條相模人邊を討滅せし
る。義朝の重臣石見守中原相模人邊に内
應し、茶會に托して己が邸に實朝を誘引して
殺せんとす。實朝幸じて免れ落ち行く途に八
瀨の里にて菊姫に遇ひ、鞍馬路を尋ねて其家
に泊す。其夜中原等に攻寄せらる。實朝奮闘
したれども衆寡敵せず、搦められて六波羅に

日野中納言資朝。後醍醐天
皇の御孫に參興し、北條相模人邊を討滅せし
る。義朝の重臣石見守中原相模人邊に内
應し、茶會に托して己が邸に實朝を誘引して
殺せんとす。實朝幸じて免れ落ち行く途に八
瀨の里にて菊姫に遇ひ、鞍馬路を尋ねて其家
に泊す。其夜中原等に攻寄せらる。實朝奮闘
したれども衆寡敵せず、搦められて六波羅に

引かれ佐渡に流さる。佐渡郡司山城入道三郎が資朝の首を刎ねんとするや、乃ち一首の辭世を詠じて從容死に就く(本朝用文章)

すけなり 曾我十郎祐成。新田四郎忠

常に逢うて曾て虎御前が厚情に預りたるを謝し、不俱戴天の仇工藤祐經を斬らばその後必ず忠常の手にかかつて死すべきを約し、富士裾野の狩にて祐經を射殺さんとして果さず。喜瀬川の遊女龜菊に遇うて祐經のこゝろを尋ね、建久四年五月二十八日夜祐經の假屋に斬入り、本望を遂げて忠常に討たる(百日曾我)

山中にて犬坊九近江・八幡等に攻立てられ、危急の場を祐成に化けたる白鹿に救はる。祐成の姉が二宮太郎と婚禮の時、姉の爲に大儀の遊女より小袖を借りて祝宴の席に飾る。工藤祐經領内の土民に命じ石打に托して祐成を殺さんせしむ。五郎時宗駆けつけ、祐成を救さんせしむ。かくて後、大儀の遊女に虎御前と訣別の宴を張り、其夜の夢に京の小二郎を斬殺す(曾我五人兄弟)

大儀の遊女虎御前と懇懇を運す。虎御前の兄小柴掃部勝重・虎御前を尋ねて来り、父が非業の死を語り、共に仇討せんとし相伴うて遊廓を出奔す。祐成之を見追跡して其心事を知り、三人相共に宿願寺に五郎時宗を訪ふ。時宗より勸當を受くるや、祐成は時宗の爲に哀訴し、母より二子に烏帽子小袖を與へらるる所哀れを頼む。頼朝の御狩揃ありし時曾我二子は勝重と共に土民に扮し、勝重の仇番場忠太尉久に近寄つて刺殺す(大儀虎)

大儀の遊女虎御前が曾我老母の問居を訪へる時、祐成より草を握ひて歸り、母の意に従

人名部

うて母を乳母披にし、弟の五郎に問答められ泣き、母に迫りて五郎の勸氣を免さるるや哀訴し、母より小袖を貰ふ。曾我二子忠成父の仇を報ぜんとしして富士裾野の狩場に赴き、下人の鬼王團三郎に託して乗馬に形見の品物を添へて母の許に歸し、建久四年五月二十八日夜二子頼朝の假屋に亂入り、亡父の仇祐經を斬つて死に就く(曾我扇八景)

秩父重保・朝比奈義秀が大儀の遊廓にて虎少將を擧げて遊興せるを見、祐成の心平かならず狼藉に及ばんとせしが、重保より父の命なりと黄金五十枚を恵まれて其厚情を感謝す。また龜菊の同情によつて虎少將と相逢へる際、祐經の兵に包圍せられし義秀の助勢を得て八幡三郎を斬る。かくて後富士裾野の狩場に赴き、虎少將に逢うて暗に訣別を告げ、建久四年五月二十八日夜頼朝の假屋に斬入つて亡父の仇祐經を殺し、仁田四郎と戦うて死す(曾我虎が屠)

母の病氣を看病して孝養を盡し、弟時宗が勸氣の故免を母に哀訴す。かくて建久四年五月富士裾野に赴き、虎御前の手引にて工藤祐經の假屋に入りしが、祐經に覺入り、魚の料理を命ぜらる。後時宗と共に覺入り、父の敵と名乗つて祐經を斬殺し、なほ頼朝の御所近く忍入つて殺さる。頼朝・祐成の孝心を激賞し、富士裾野に社を建てて其靈を祀る(加増曾我)

父祐成が工藤祐經の爲に殺さる。是に於て曾我二子は父の誓を報ぜんとし、建久四年五月二十八日富士裾野の祐經の假屋に忍び入り、團三郎より母大病なる由を聞き、祐經より實ひたる騎馬に乗り、狩場より引返して母を見舞ひ、母に畫圖と形見を残して、再び狩場に

赴いて夜頼朝の營中深く亂入り、祐經を斬つて本望を遂げ、なほ十數人を斬りしが遂に仁田四郎忠常に殺さる(曾我會替山)

すけのぶ 曾我太郎祐信。姿を襲して

善提寺に行き、河津祐重の寡婦が一萬箱玉の二子を連れ、墓葬したるに近づき、遠からずして頼朝の世とならば伊東家も滅亡せん。貴女若し我意に従はば二子を我子として養育し、祐重の妾めをも晴さんとす。寡婦其志に感じ、二子を連れて祐信に再嫁す(頼朝伊豆日記)

河津三郎祐重赤澤山にて非業の死を遂げたる後、其寡婦を迎へ其二子を養育せるを、工藤祐經の爲に頼朝に訴はられ、曾我二子罪せられて由比濱に引出さるるや、祐信深く悲歎に暮れて自らも死せんとす(本領曾我)

備前兒島に陣して源頼朝の軍と對抗せしが、範頼の部將佐佐木三郎盛綱の騎戸浦先陣によつて破らる(佐佐木先陣)

長柄の百姓なり。報恩講の金を預り、頼朝の引出中に收めて其鐘を賣忘る。後その金の無きに驚き、義子市郎右衛門が奪取したるものと思ひ、市郎右衛門を殺打して家を放逐す(心中二枚繪草紙)

すけあもん 助右衛門。京都四條烏丸

大經師以善の手代なり。相手代茂兵衛の罪を發いて之を責責し、また下婢玉を縛りて玉の請人赤松梅福に渡し、梅福に隠打せらる。かくて後おさん・茂兵衛が縛に就くや、來つて之を請取らんとして捕吏に叱責せられ、梅福に額を斬付けらる(大經師告廳) 木花

すさのをのみこと 素盞鳴尊。

開耶姬を奪はんとして内裏に赴かれ、惡鬼の化身若長姫に寶劍を奪はれ給ふ。是に於て惡鬼三熊大人在を征服して寶劍の所在を白状せしめて凱旋の途中、尊の臣藤原香房尊に御謀反を勧めしかども、天稚孫兒屋根の臣の諫言によつて御心を頼し、必ず寶劍を取返さんとして八岐の大蛇討伐を思召立たせ給ひ、蘇民將來の家に泊り、別れを惜まざりて啤の袖を手折り、之を削つて小札となし蘇民將來子孫也と誓付け、惡病の御守となすべしとて之を授け給ふ。かくて尊は出雲國簸の川上に着き給ひ、稻田姫に逢うて相思の仲となり給ふ。折しも姫大蛇に犯さる。尊乃ち姫の左右の袖を裂きて風を吹き、熱氣を漏して病を癒し給ふ。姫大蛇の人身御供に當るや、尊劍を姫の袖に刺めしめて出し、其後を追うて行き、八雲に酒を漏へて大蛇を屠り、寶劍を奪返して凱旋し給ふ(日本振袖始)

すず 阿鈴。新田義員の部將直利新左衛門

の室なり。元弘三年卯月下旬義貞鎌倉攻の軍評定の席に出で、義貞の弟歸隆次郎勲助との不和を諱む(相模入道千正大)

すまさう 須磨藏。播磨真古川民部少輔

藤原孝房の僕なり。孝房の父致孝の後妻が孝房夫妻及び其子の死を雲が洞に祈るを自撃して、これを孝房の異母弟教信に語る。かくて後變化及び熊原太と力敵して死し、其力脚に留りて變化を退治す(賀古教信七懸龜)

すゑしげ 平山武者所季重。源氏の家

臣にして一の谷の合戦に武功を立てたり。赤坂の宿にて人賣に勾引せられたる熊谷直實の子の清姫・小太郎種直を救ひ、また九州粟津の松原にて熊谷入道が種直を殺さるる場を邂逅

し、清姫を己が子の妻として貰ひ受く(大原 間宮再業苗)

すゑたけ

初め卜部藤武と云ふ。美濃の深山に住み、旅人の首を刎て樽に吊す。或日源頼光の通るを呼掛け、其威に服して臣となり、卜部季武と命名せらる。これより主従共に信州上野の山に分入りて山姥に遇ひ、江州高懸山の悪鬼退治に従つて武功あり(嬭山) 源頼光の四天王の一なり。主命によつて江文宰相爲成夫妻を追放す。後、葛城山に良門及び土蜘蛛退治の軍に従ひて武功を立つ(關八州繁馬)

せいさん

静三。大阪新町遊郭屋敷の穉老となつて玉と云ひしが、同家の木太夫鬻の娘後比丘尼となりて静三と法名し、北條殿に庵室を結び夕霧の善徳を吊ふ。偶比丘尼の知貞來り、夕霧の娼婦也來り、春姫の父拍左京進盛光も來り訪ふ。是時近藤兵庫守廣忠の兵に襲撃せらる。静三乃ち知貞と共に遁走す。かくて後諸方を巡りて遊女の文を兼良に吉野の奥に玉塚塚を造り、遊進に出でて衆良に至る。盛光の妻も尼となつて静三の連れとなる。廣忠と道に遇つて静三・知貞共に縛せられしが盛光に救はる(三世相)

せいじふらう

清十郎。和泉國水間の里の農夫佐治右衛門の子なり。播州姫路の米間屋伍馬屋九左衛門の手代となり、主人の娘お夏と相愛せしが、友手代の勘十郎及び源十郎の奸策に陥れられ、冤罪を負つて主家を放逐せらる。清十郎悲憤に堪へず、勘十郎を刺さんとして誤つて源十郎を殺し、脱走して長崎にて捕へられ、刑場に引出されたる際お夏の來れるを見て喫煙の火を貰ひ、煙管にて咽喉を突破りて自殺す。行年二十五(五十年忌 歌念佛)

せいばんねん

齊萬年。雲南の人に、一貴と力を結して負け、主従の約を結ぶ。福建國守六安王を其城に攻めて滅す(唐船新今 國性節)

せいめい

安倍晴明。陰陽師なり。花山法皇と右近の前と争へる場に来つて、右近の前を祈禱して右近の前に宿れる物怪を祓ふ(傾城酒吞靈)

せいしやう

少將。假粧坂の遊女なり。箱王を嫁まひ相愛して契を結ぶ(曾我五人兄弟)

せうしやう

曾我五郎時致と契する。時致亡父の仇工藤師經を討取らんとして富士裾野に赴きし後、枕邊に殘せる書簡を見て直に其跡を追ふ。時致木鬘を遂げて刑に就きし後は、髪を切り尼となつて時致の菩提を吊へり(百日曾我)

て師經を討たしめんとして、時致の下人の圓三郎が遊郭の夜番となれるを自ら之に代り、圓三郎をして曾我二子に師經の動靜を通知せしむ。後、虎御前と共に富士裾野の假屋に曾我二子を訪ひ、また曾我老母・虎御前と連立ちて時致の捕へられたる處に赴く(曾我八景)

或夜虎御前と共に秩父重保に掛けられたるを、師經一味の多勢に包圍せらる。少將乃ち辯舌を播つて之を退去せしむ。後、虎御前と共に曾我兄弟の跡を尋ひて富士の狩場を彷徨ひ、近江小膳木に始められて殺されんとせしを、人穴に迷入りて仁田四郎忠常に助けられ、祐成に逢つて訣別し、また時致が五郎丸に捕縛せられて引かかるる場に赴く(曾我虎が懸)

假粧坂の遊女なり。髮結の綱の宅に於て箱王を見と懇懇し、元服の祝儀として櫛を贈り感謝を通す。曾我二子敵討の翌日少將は伊豆二郎頼兼に捕へられ頼朝の前に引かれしが、頼朝兼に捕へられ三郎の體懐によつて曾我二子の首を見、泣く泣く御前を退出す。かくて後曾我二子の弟頼朝が越後の國土寺に訪ふ。頼朝坊が頼朝の意を受けて曾我二子の社を富士裾野に建立するや、虎少將は西國四國の戰場の繪馬を捧げて祭典を舉行す(加増曾我)

曾我五郎時致と情交密なり。曾我二子が亡父の仇工藤師經を殺さんとて富士裾野に赴くや、少將は時致の母及び虎御前と共に其跡を慕つて迷ひ行き、明葉坂の龜窟に遇つて密中の状態を尋ね、頼朝前と共に雨を祈つて頼朝の出發を遅らさんとしたり(曾我齋藤山)

て渡邊綱の伯母なり。老婦に扮して佐佐目少貳と假名し、源頼光に面會を求めて頼平の死罪を謀す(關八州繁馬)

せきもりりゆう

五府將軍石門龍明の永徳帝の逆臣なり。繼親主に内應し、國性節逆ありと謀變し、遂に反して甘藷を攻破り、國性節の據れる東澤島の工風の間に闖入して經錦宮に捕へられ國性節に斬殺さる(國性節後日合戦)

せみまる

蟬丸。延喜帝第四の皇子なり。琵琶に妙を得。木幡の里にて右大辨早廣の兵に襲撃せられしも、千手入道父子の忠勳によつて免るを得たり。蟬丸もこのり美男なりしかば、歌多の女より戀慕され又恨みられしにて盲目となる。是に於て父帝の勅命によつて蓬坂山に棄こらる。或日直徳との情事を思出して蓬坂山の歌を詠じ、計らずも直徳に遇ひ、また人鷹赤人の靈に遇ふ。早廣平定の後、安居院の小聖をして蟬丸の北の方を供養せしむ。是に於て女の怨靈去つて蟬丸の兩眼忽ち開く(蟬丸)

せりつみひめ

芹摘姫。聖德太子の妃にして隣國寶の妹なり。守屋の家土東直駒の軍に圍まれしが、跡見赤袴防戦して直駒を斬り、其部下を追捕つて妃を遁れしむ。妃は侍女の玉鬘を連れて奈良手向山の邊に落ち延び、鉢間坊主の家に泊り給ふ。折しも調使丸來つて太子梵天宮へ参向せられたる由を物語れる際守屋の部將弓削登來馳ぎ、鉢間坊主

即ち達磨と現じ覆殿して賊を破り、葦舟によつて芦福庵等を通れしむ(聖徳太子繪傳記)

せんにしはう 禪師坊。曾我五郎時致の弟にして父の死復生る。越後の國上寺に登りて僧となり、三河國鳳來寺にて初談義を勤むる際、虎御前に懺慕して醜態をなす。蓋し殊更にこの舉動をなして、母をして時致の勳當を赦さしめんとすの深意に出でたるなり(曾我五人兄弟)

曾我二子の弟なり。曾我二子が亡夫の仇工藤祐經を斬つて本領を遂げたる後、禪師坊は海野小太郎氏に召捕られて刑に就かんとする時、母來つて悲歎に暮る。禪師坊即ち三部經を説きて之を悟し、從容として死せんとせる時新田四郎忠常に救はる(百日曾我)

藤澤に來つて石花菜の店を出す。工藤祐經の家來近江小藤太及び梶原景高等立寄る。景高、小藤太に命じて藤澤寺の鐘を撞いて時刻を誤らしめ、以て曾我二子に同情せる二宮安清の富士裾野へ注進の早打を妨害せんとす。是に於て禪師坊藤澤寺内の岩頭に登り、大音聲にて、これこれ危相なされな時が過つたと呼ははり、小藤太と稻闕して鞭び落ちたるを、安清飛掛つて小藤太を刺殺す(曾我會稽山)

越後の國上寺の僧なり。京小二郎が工藤祐經の下人近江八幡を伴ひ、五郎時致なりと詐稱して來り禪師坊を搦め行かんとす。此時鬼王兄弟來合せ、小二郎の偽騙す。禪師坊乃ち謀計を以て小二郎近江八幡を殺して鎌倉に赴く。頼朝、禪師坊の心を賞し、富士裾野に義經及び曾我二子の社を建てて其社僧たらしむ(加増曾我)

せんじゆひめ 千壽姫。藤原孝房の子なり。祖母に化けたる蜘蛛に吞込まれ、死して餐の河原に遊ぶ。後、叔父教信及び弟の法明上皇の回向の功徳によつて極樂に往生し、母に抱かれて藤嗣の姿を現す(實古教信七墓廻)

せんじらう 善次郎。市郎右衛門の弟にして無賴漢なり。酒色に耽つて借財嵩み、其返済に窮して父の預ける報恩講の金を盗み、其罪を免じ嫌す。かくて兄の亂染遊女お島に邂逅して怨言を馳かざる。兄遂に自殺するや、我身の非を悔いて兄の屍を納む(心中二枚箱草紙)

せんだんくわうによ 梅檀皇女。大明十七代思宗烈皇帝の妹なり。逆臣李貽天が體懸兵を遣いて皇帝及び華清夫人を弑せし時、皇女は吳三桂夫妻に救はれて、海道一の港より船に乗つて肥前の平戸に漂着し、和藤内に救はる。後、和藤内の妻小睦に連れられて明國に渡り、九仙山にて吳三桂に會す(國性流合歌)

梅檀皇女と甘藷と婚禮の宴席にて甘藷と國性翁と口論を始め兩人不和となる。この夜石門龍反して來襲す。皇女身を以て刃れ國性翁の跡を追ふ。敵の追撃急にして勾容縣にて身危くなるや、吳三桂仙人に化して現はれ皇女を救ふ。かくて後皇女は吳三桂に連れられて東寧城に渡り、國性翁に頼ることとなる(國性翁傳日記合歌)

せんつるまる 千鶴丸。伊東祐親の娘八重姫と頼朝との間に生れたる子なり。祐親の爲に松川の奥とどきの湖に沈めらる(頼朝伊豆日記)

ぜんによりゆうわう 善女龍王。浦島太郎と契つて生める子を原行平に賣はれて若官になされしが、恒寂僧都等河原を食はして其子を無殺せんとし海に釣絲を垂るるや、龍王乃ち其釣三本を嚼切る。また美女に變じて松風の魂と入替り我子に逢ふ。松風が恒寂等の兵に燒戦野に圍まれたる際、龍王廣澤の池より現はれれ出で我子を奪ひ、樹枝に登つて去る(皆末善兵衛)

ぜんべゑ 皆末善兵衛。河内屋與兵衛の友なり。與兵衛等と共に野崎麥詰の途中、遊女小菊を連れたる會津番の郎九と喧嘩す(女殺油地獄)

せんゑもん 伊吹千右衛門。伊吹重太夫の子にして、成田久米之介に殺されたる卯之介の兄なり。播州仙磨の大名石塔奉納の使者となりて高野に登り、吉祥院にて久米之介に邂逅す。是時久米之介の女犯暴露して寺を放逐せらる折なりければ、千右衛門乃ち弟の敵思知ると、刀の背にて久米之介を打懲す(心中萬年草)

そうざゑもん 小町屋惣七。小町屋惣七の父なり。惣七が海賊の仲間に入るを推知して大に怒り、惣七の留守宅の家財を捨敷にし、歸り來れる惣七をして早く遁れ去らしむ(博多小女郎被殺)

そうしち 小町屋惣七。九州通ひの京商人なり。門司が關にて海賊毛刺九右衛門の船に乗合せ、海中に投込まれし辛うじて一命を拾ひ博多に漂着し、馴染の柳町與田屋の遊女小女郎を訪うて不運を語り歎く。是時偶

然再び毛刺九右衛門等と相會し、脅迫せられて海賊の群に入りたる富を奪む。父惣七衛門は惣七の俄分限となれるを怪しみ、惣七を諭して京の地を遁れ去らしむ。惣七乃ち小女郎と共に伊勢路に出奔せしが、途に逮捕せられて自刃す(博多小女郎被殺)

そうとく 吉文字屋宗徳。箱屋徳兵衛の義勇なり。口入業治右衛門の通知によつて徳兵衛夫妻が借金せしを聞き、怒つて徳兵衛の宅を訪ひ、お辰に會して借金の理由を詰問す(心中重井筒)

そうべゑ 徳兵衛。江戸屋勝二郎の手代なり。主人の放埒に乗じて許多の金を騙着し、忠義の手代新七を放逐せしが、遂に悪事をたくみしこと露顯し、官より其一味の徒と共に粟田口にて刑せらる(淀岬出世蒲團)

そうま 舟越惣馬。大和國宇陀郡龍門家の重臣なり。遠坂金人等と奸策を廻らし、香春大炊之助綿定無入の宴席にて、綿定を殺さんとして綿定の異母弟徳法法爲に妨げらる。後、禁中御能の會の藝圖を勤め、故意に標を以て徳法の頭を敵打して徳法に刺殺さる(傾城吉岡染)

そみんしやうらい 蘇民將來。倉保の長の子にして、且且將來の弟なり。且且に田地を奪はれて家貧困となる。或日菜羹噉將來られて一夜の宿を請はる。即ち禮を盡して待遇し、出雲に下り給うては手紙乳方に泊り給はんことを請ひ、夫妻別を惜んで尊に送り給ふ。尊其息を諭し、蘇民將來子孫也と誓付けて、蘇民將來の御守を授け給ふ。かくて後蘇民將來が我田より父の屍を發掘して驚き、且且が父を弑して我田に埋めたるものと知り、夫妻協

カして巨目を殺し、大山祇に伴うて出雲に下り、手標乳の宅を訪うて素戔嗚尊に謁す(日本振袖始)

そろり 鞘師曾呂利。眞柴肥前大領久吉に仕へ滑稽に長す。嘗て奥小姓羽川算三郎が久吉秘蔵の鉢鍬の松を預りて之を枯したる時、曾呂利一首の和歌を詠じて久吉を祝す。久吉其歌をめで褒美を與へんとし欲する物を嘗はしむ。曾呂利乃ち紙袋に只一杯の米を拜領ししと述べ、幅五間長さ十四間の紙帳を倉庫に打破せし座をして笑ひ興ぜしむ。久吉大佛殿を建立して其供養のし、曾呂利まづ至り大佛殿の堂上に腹這ひて煙草を喫し、鼻穴より森を指して飛下る(本朝三國志)

だいにかくだいでそうじやう 大覺大僧正。近衛經忠公の子にして月光と云ふ。幼にして兩鬚を失ひ繼母に疎まれ、亡父の善擧を昂はんとして嵯峨の大覺寺の僧となりしが、日像の徳に感じて法華經の行者となつて宗意を究む。或日鹽谷左京時平の兵に寺院を襲はれ、また勅命と伴り日像等と共に舟に乗せられ播磨沖に沈められんとせしが、法華經の功力によつて難を免かれて兒島三郎高則の家に養はる。かくて勅命によつて日像と共に新雨の修法をなして雨を降らす。爲に敬感によつて宗祖を日蓮大善禪、日像も善隣號、大覺は大僧正の號を賜はる(大覺大僧正御傳記)

たいそうくわうてい 太宗皇帝。唐第二世の皇帝なり。大纒冠錄足の頰藤照姫を迎へて后妃となさんとし、萬戸將軍雲宗を使者として結納の進物を携へて日本に遣はす(大纒冠)

だいでそうじやう 鞍馬大僧正。鞍馬

山の天狗なり。嘗て義經と師弟の契をなす。義經高麗の戰に破れて短鬼に赴くや、大僧正は老翁と變身して釣籠を垂れ、義經に逢うて戒むる所あり。錦戸太郎國衡等が義經を敵を壓殺す(源義經將墓記)。釋尊の法眼なり。十二歳にして一丈五尺四寸の身長を有し勢力あり。淨飯王の養子たらんとし得ず。また耶麻陀羅女を稱戀慕す。釋尊出家の後、左衛軍右衛門等と共に恒河橋畔に耶麻陀羅女を要娶して奪はんとせしが烏陀夷に破らる。釋に隨に服して佛門に歸依し天王如來となる(釋迦如來誕生會)

だうけん 不破入道犬。六角左京大夫顯賢の家老なり。顯賢の抱給師雲谷等と黨を結んで、狩野四郎二郎及び名古屋山三春平を放逐す。春平浪人となつて道大の子伴左衛門を京都御原遊師の大門口に斬殺す。道大怒つて春平を竊殺人罪に訴へしが、却つて春平を罪に處せらる(傾城反理香)

だうじゆん 岐阜屋道順。大經師以春の妻おさんの父なり。おさん手代茂兵衛と思ひがけなき不義に陥つて断屠する途に道順を訪ふ。道順憐んで銀一貫目を與へて引かせる。後に兩人捕吏に名捕られて刑場に連れてらるや、道順悲歎に暮れ身を以て罪を請ふ(大經師普應)

だうまん 蘆屋道滿。花山天皇の頃の陰陽師なり。弘徽殿女御の御懐胎を賀茂河原に祈禱して安倍晴明と論争す。藤原女御殺害に遭ひ、其怨靈毒蛇となつて宮中に現はれたる

を道滿被殺けんとして行方端く。また弘徽殿女御を按察左大將早岑の邸に誘ひ出さんとし、失敗し、清所の瓜茄子に魂を入れ加持して歸り、早岑と謀りて花山天皇を弑し奉らんとし遂に成らざる。男山八幡宮に隠れ給へる弘徽殿女御を奪はんとし平次兵衛盛重と共に襲ふに、取殺して又五郎義長に殺さる(弘徽殿綱目傳家)

たうみんし 陶民子。江南の刀工なり。康熙五十七年二月福建國守六安王の命を奉じて寶劍を鍛へ、妻をして合鑪を打たせしめしが、打納めの合鑪の時に妻の入髪ゆるみて爲目より抜け落つ。陶民子これを見て密夫の爲に髪を切れるものと疑ひ打打せんとす。妻一室に駆込んで障子を閉つ。陶民子益怒り妻を自懸けて寶劍を投げ、妻直に其劍を拾うて基下に墜し、他の劍を己が腹に突立つ。劍奉行馬府官は腹に突立てたる劍を奪ひ、寶劍と信じて持ち歸る。是に於て妻は夫に謝し、妻はもと明の皇族繼體王に仕へ、連子の宋一貫は王の胤なるを語り、宋一貫を世に出さん爲己が髪を切つて宋一貫の髀に縫合せたることか明かす。陶民子は妻のこの言を聽いてきてはと驚き、己が短髭なりしを謝して決意す。是時馬府官の軍押寄せ、寶劍を取替へたるを詰つて陶民子を捕め去らんとす。陶民子自刃す(唐船新國性鑑)

たかこ 高子。清和天皇の中官なり。惟喬親王に奪去られんとせしを、在五中將業平に助けられて紀有常に預けらる。この事惟喬親王に知れ、親王乃ち有常を召喚して中官の首を刎めべきを命ず。是に於て有常の密死して中官の身代りとなり、中官は紅梅に連れられ、清和天皇を尋ねて高安の里に下る(并簡業平河内道)

たかさと 鹽谷判官高貞。高貞の室清水親吉に詣つ。高武藏守師直その美貌を眺めて戀慕に堪へず、鹽師寺公義をして口説かしむ。高貞之を見て大いに怒り、師直の膝に乗懸つて之を苦しむ。されど之が爲に師直より將軍家に議發されて切腹することとなる(兼好法師物見草)

たかさと 望月六郎左衛門高貞。狛左京進盛光の家子なり。主君の姫香姫が繼母に虐待せられ、奈良猿澤池に投せられんとする場に密夫の近藤兵庫守廣忠に殺せんとする場に出遇ひ、直に香姫を助け廣忠等と戦ひ、山城伏見の南玉水の窟が下まで落ち延び、香姫に對ひ、髪に酔三比呂尼を尋ねて便らるべきを語り、痛手に堪へずして鬻る(三世相)

たかしげ 長崎次郎高重。北條高時等部將なり。元弘三年五月二十二日新田義貞等

其鏡を見舞んで之を助く。是に於て高家深く感激し、爲に其恩を奉ぜんとす。義貞戰敗れて窮せる時、義貞の身代りとなつて大森彦七盛長に斬らる(吉野郡女補)